

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1989 6



第88巻 第6号 日本幼稚園協会

新 版 幼 稚 園

— 人間関係と学習の場 —

幼稚園とは何をするとところか？ 人とのかかわりのなかでさまざまなことを身につけていく場としての園での生活を、多くの事例を通して意味づける実践研究書。



K・H・リード・著 宮本美沙子／落合孝子・共著

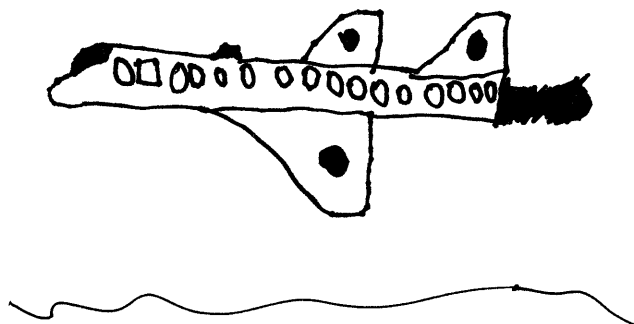
B5変型判・416頁・定価3,296円(本体3,200円)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの

フレーベル館

幼見の教育



第88卷 第6号

幼児の教育 目次

—— 第八十八卷 第六号 ——

© 1989

日本幼稚園協会

△巻頭言▽

体験を通じた活動を………秋山 和夫…(4)

子どもの思いを追って………津守 真…(6)

倉橋先生から学んだこと………安村 ふさ他…(12)

ごっこ遊びっておもしろい………田村 玲子…(30)



リズム遊び

——戸倉ハルの作品を通して——……………吉成 啓子…(37)

臨床の現場から

私の出会った人々(二)……………安島 智子…(48)

ことばを生きる体験(二)

——乳児との語りあい——……………浜口 順子…(56)

表紙イラスト・津守 たたえ

扉題字・堀合 文子

扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園児

カット・福田 理恵

編集委員・本田 和子／村山 英子

上坂元絵里

編集部・大沢 啓子



体験を通した活動を

秋山 和夫

保育者にも理解できにくい幼児の行動が増えてきている。いらいらして落着きのない子、奇声を発する子、友達とうまく遊べない子、とくに自閉症というレッテルをはられていなくても、そうした行動を示す幼児が目につくようになってきている。

このような行動が増えてきた理由や原因はさまざまであろう。これまでは、それらは親子関係のあり方の中で考察し、改善を図っていくべきものと考えられることが多かった。たしかに、子どもがどのような行動様式を持つかということは、親の養育態度によるところが大きい。

その場合、過保護、過干渉、放任、受容、承認といったキーワードで、親子関係の現実を考え、反省して

いこうとすることが多い。

子どもをより良くしていくために、幼児が体験を通した活動を見直してだけやっているかという観点で、幼児の活動を見直していくことが、現在とくに必要なのではないか。具体的な経験を通した活動の欠如が、現在の子どもの行動をおかしくしている原因のひとつであると私は考えている。

血のぬくもりのある動物に接していれば、動物への愛情は自然に湧いてくる。毛虫を観察したり、草花を育てていけば、自然の不思議さにも気づいてくる。ざりがにに指をはさまれたり、どじょうがなかなかつかめなかった経験を持っておれば、自分の思いどおりにならない世界のあることに気づいてくる。

友達に手伝ってもらってはじめて箱車の釘打ちがうまくできたこと、友達数人と協力して大きな砂山を作った遊んだこと——こうした活動の中で、友達といっしょに活動することが、一人で遊ぶより異なった面白さが味わえ、又、友達との助け合いの必要性や相手への思いやりの心が育てられていく。

幼児期の教育というと、文字を教えたり、ピアノを習わせたり、体操教室に通わせることによって、知識や技能を身につけさせることだという考え方を持つ人が多い。そのために、動植物を手にしたたり、仲間との遊びは子どもの閑つぶしであり、親からすればどうでもよいお遊びとしか考えられていない。

新しい幼稚園教育要領ではその内容改善の視点として次の三つが挙げられている。

ア、人々のかかわりを持つ力を育成すること。
イ、自然とのふれ合いや身近な環境とのかかわりを深める。

ウ、基本的な生活習慣や態度を育成すること。

これらのことを幼児の身につけさせるためには、具体的な活動や体験を通す以外にはないのである。単なるお説教ではどうにもならないことなのである。

新幼稚園教育要領で、これら三つの点が強調されているのも、現在の子どもの現状をふまえてのことである。幼児に具体的な活動や体験を豊かにさせることによって、人間らしさを回復させたいと願うからである。

文字やピアノの指導では、その指導効果が誰の目にもはっきりする。しかし、体験を通した活動による幼児の内面の育ちは、一般の大人にはなかなか見えにくい。

幼児を人間らしく育てていくために、幼児教育はどうあるべきかが、鋭く問われているのが現在である。

(岡山大学)

子どもの思いを追って

津守 真

はじめ出会ったときには、たいした意味もありそうにない行動と見ていたことが、一日を子どもと一緒に過ごすうちに、そこには子どもの思いがあったことを知らされる。子どもはそれぞれの思いを心に抱いて一日を生きている。その一日だけでなく、日々を貫いて子どもの生活の底に流れている思いもある。

ある朝、T子が庭のブランコの上の高い所に乗ったまま部屋に入ってこないんですと、母親が私に知らせにきた。いってみるとブランコのわきの木に上り境界の金網に足をかけている。かなり以前に、T子はこの同じ場所で金網の向こうにいきたくて、一日中そこを離れずに不満気な低い声を立てていたことがあった。それが数日もつづいたので、そんな

にいきたいのならばと私が手をかして金網の向こう側におりた。T子は境界の外をひとめぐりして門から入ってきた。金網の外側から内側へと空間を自分の足で歩いてたしかめればそれでよかったのである。次の日から、T子はその場所に留まらず、学校中の高い所や低い所を、地下室から二階の片隅まで歩きまわった。T子は学校の空間を細部にわたるまで自分のものにするを試みているように見えた。

この日私の傍に立っていた見学者に私はこのことを話すと、その人は「ただ高い所に上っていると見えるだけの子にも、それなりの思いがあるのですね」と云った。私はいい点に気が付いてくれたと思った。

この朝ブランコの上から離れなかったT子に、金網の向こう側にいきなければ一緒にいくよと声をかけたが、この日はそうしたいのではなかった。私の肩や頭の上に片足をかけ、片足を樹木やブランコにかけて動き回った。大人によりかかることを求めているT子の気持が次第に私に伝わってきた。午後になってT子は保育室の隅の中二階の狭い空間で、数人の子どもたちと一緒に、テープの音楽をきいて長い時間を過ごした。他の子と身体を寄せ合って狭い空間にすることがこの子に快くなってきたように思った。子どもと一緒に生活をつくっていくうちに、子どももの心にある思いが、次第に大人に明瞭に見えてくる。

* * * * *

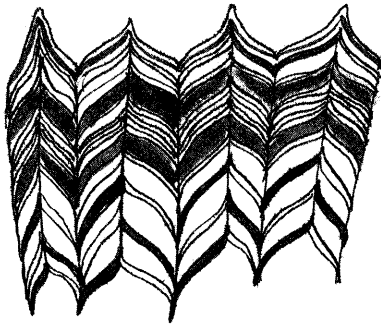
私が床に腰を下してひとりの子どもの相手をしていたとき、三才になる職員の子どもが傍で紙を破いていた。はじめは一枚のわら半紙をおそるおそる破いていたが、そのうちに次々に細長く破きはじめ、ついには何枚も重ねて破いた。日頃ききわけのよいこの子どもが紙を破くのは、何か子どもの思いがあるように感じられて、私も一緒に紙を破くうちに、この子は私に対して自分を守ってくれる人と思ったのだろう。私が少しでも位置をかえると私を追って移動するので、私はこの子からはなれられなくなり、もうひとりの子どもを他の人に委ねてこの子の傍に留まった。

紙を破くのは生産的な活動ではない。破くのをやめるように言えば、この子はやめたりう。しかし内心にはもっと思い切って破きたい気持があったと思う。破ける音、破く手先の感触、紙の破け具合など、何のためにということはなく、音や感触をたのしむこと、ふだんやれないことを思い切ってやるよろこび、それを共にしてくれる大人への親しみ、など。床は破いた紙に埋まった。私も破かせてだけおくことにはためらいがなかった。破いた紙を電車に見立てて窓や車をかいたりしたが、それは余計なことだった。この子どもはいわば悪の世界に入りながら、破くイメージをたのしんでいた。この子なりに自分の小さな粹をひとつはずした体験をしたのではないかと思う。次の日、この子に会っ

たとき、この子は私と遊ぶことを求め、帰る時間になったら、涙を一杯ためて、「いいよ、かえるよ」と言っただけでがまんした。前日の紙を破く遊びが、この子にとって意味あるものであることがたしかめられた。

* * * * *

はじめての幼稚園を見学するとき、私はどこに自分が位置してよいか迷う。どの子どもにもそれぞれの思いがあつて動いているのだらうと思うが、最初はそれが見えない。自分が訪問者になるとそのことをつくづくと感じる。ある幼稚園を訪ねたとき、ひとりの女の



子がきれいな包装紙をひらひらさせて、破けてると私に見せた。みると紙のへりがほんの少しささくれ立っている。それだけで破けてるというのだから、その子は破きたいのにそれをできない自制心がはたらいっているのかもしれない。もしもこのきれいな紙を破くことができれば、私との間で、この子は何かを乗りこえられるのかもしれないと私は考えた。実際、私がそうしていたら事態は違った風に展開していただろう。私が考えているうちにその子は包装紙を自分の股の間にいれて「おしめ」と言う。私はこの子の家に赤ん坊がいるのだらうと想像した。もしもそうならば、幼稚園にきているときにこの小さなお姉さんを可愛がってあげたいなと思う。何度もおしめをあて、私はその相手をして、おしめを干したりして遊んだ。そのうちにその女の子はどこかにいってしまった。しばらくして気がつく、戸外のテラスで小さな貝殻に根気よく糸を通して通している。私のところにきて、針に糸を通してくれという。穴が小さいので私は眼鏡を出して通した。しばらくしてまた針と糸をもってきて、糸がぬけたというので、針の小さな穴に糸を通して結びめをつくってやった。もしかすると、時間をかければ自分でやれるのかもしれないが、大人がそれをやってあげることに意味があるのだらうと思われた。

帰りがけ、玄関まで子どもたちを送ってゆくと、その子の母親が来ていない。その子はひとりで靴をはきかえ、玄関を出て、母親達の群の後の方まで歩いていったが母親が見つからず、自分の部屋の前まで探しにいったテラスに腰かけた。傍に別の子の母親がいる。

私も傍に腰をおろすと、その子は目を赤くして涙がにじんでいる。でも泣かずにその別の子の母親と帰っていった。

あとで担任の先生にきくと、その子の家には最近生まれたばかりの赤ん坊がいるのとのことだった。紙が破けると私に見せにきたそのときから、この子の心には生れたばかりの赤ん坊と母親とが占めていたのだった。

その日の子どもの思い、すなわち、子ども自身にもまだ明瞭に意識されていないがしかし確かに存在する心の思いが、どの子どもにもある。それが行為になるとき、子ども自身にも大人にもその思いが見えてくる。大人がその行為にふれて、その中にある思いに応答して、そのときそのときを過ごす、子どもの行為は展開し、思いは実現に至る。

保育の実践は、子どもの思いを追いながら思索する生活である。身体を労するだけの仕事ではない。

(愛育養護学校)

倉橋先生から

学んだこと

人、それぞれ、学生時代の有形・無形のノートを持ち、先生の「おことば」や「お教え」は、その後の人生そのものを方向づけることも多いと思われまます。

また若年ゆえに、その時点では理解が浅く、さして重要とも思われずに過ごしてきた事柄などが、幾星霜を経た、ある時、忽然と水底から浮上するように、その深い真意が理解される、といった経験を持つこともあります。

倉橋先生の講義録の掲載を機に、講義、講演、また日常のふれあいや保育実践の中で、特に印象深く重要と思われる部分。ご自身として大切にしていच्छやったこと。更に「保育の心」として後輩に、これだけは伝えておきたいこと等、旧東京女子高等師範学校保育実習科卒業生の方を中心に、お書きいただきました。



安村ふさ 付属幼稚園勤務

倉橋先生の『幼稚園の先生というものは表面は楽しく見えるが、おもしろのしまつをしたりこまやかな心づかいがあるものだ、あなたならできる』とのおことばに力を得て予想もなかった幼稚園に奉職いたしました。五十年も前のことでございます。

ある時『何かこともに注意したいことがあったら先ずほめてからにしないで』といわれ、はっと気がつきました。

その後の先生の静かなほほえみの中に、ある時は、無言の励ましを、又ある時はお叱りを感じながら育つものを育てる、その手伝いをするという気持ちで勤めたつもりでございます。

戦争中の僅か数年でございましたが、楽しくも貴重な、なつかしい思い出でございます。

沼館正尾 大正十三年卒

倉橋先生の著書『幼稚園雑草』の「我等の途」には「教育は人情の発露である。人情だけでは教育は出来ない。研究がある。設備がある。方法がある。しかし之等は皆人情の土台の上に築かれるものである。之等のものが如何に完備しても人情の欠けた処に教育はない。我等の教育に常に潤澤なる人情味を湛しめよ。もつと大膽にあたりまえの人情を流露せしめよ。そこに初めて自分も生き子供も生きる。」とあります。

私はこれこそ教育の原点で有り、最高の理想だと信じます。五十年に渡る子供との関わりは今なお試行錯誤の毎日であり、実践はいかに難しいかを痛感しています。

悩む時は青空を、心ない言葉はかけるな、子供の真剣な生活を大切に、滲み出る教育、待つ教育等、子供を熱愛する先生の教えは、私達幼児教育者の心に警鐘を与え、反省と光明をもたらし、常に教え導いて下さいます。

現代は先生の理論を繰り返し研究する時ではないでしょうか。

柴田みどり 大正十四年卒

お茶の水で倉橋先生の講義としてうかがいました。

同級の山村先生とも暗唱し、自由遊びの根底と思っております。

「生活を、生活で、生活へ」

川崎千束 昭和三年卒

◎自ら育つものを、育てる。

幼稚園令の解釈からお講義が始まり、令の条文中、育成とはせず「培養」とした意味の深さを力説されました。

「育ての心は相手を育てるばかりでない。自分も育てられる明るい世界なのである。」

◎私が大切にしてきたこと。

- 保育の中での温み。
- 子どもの今を大切にすること。

・日々心を新たにし、精神生活の広がり努める。

◎年々、学生への躰のことは。あなたのもつ真実性だけは、どんな幼い心にも届かずにはいない。方法でも術でもない、ある日ある時、ふとにじみ出るあなたの真実性こそは、強い深い感化を与える。(育ての心より)

清水光子 昭和四年卒

倉橋先生のお講義を教室で、または講習で伺ってから半年以上もたつのに、今、平成元年の、近く出される新幼稚園教育要領の基本理念や内容が、びったり一致するというのはどういうことであろうか、と唯々感じ入るばかりである。

私が教室で受けた授業は、保育学、保育原理、教育史であった。そのどれも授業中は、あの面白く和やかなお話に魅せられて笑ったり感じ入ったり夢中だった。

ノートはといえば板書された第一章〇〇とか第二節〇〇とか書いてあるばかりで、大事な内容を試験の前に懸命に思い出そうとしても、うまくいかず困ったものであった。

しかし先生は非常に深い内容を、さまざまな文化的なものに結び付けて講ぜられた。先生のお好きだった六代目菊五郎の歌舞伎、東西の名画、例えばミレーや慈母観音、大観の富士、浮世絵、能などに現れている「人間性とは何か」を示唆されたこと、また味覚に関してというよりご馳走の話や、名苑や自然の景観について、あの豊かな感性を通しての巧みな表現に、私達は全く夢中でききほれてしまった。

その中で特にこの頃思い出されるのは、『五目ずし』である。半世紀前頃の保育内容は「保育五項目」で、唱歌、遊戯、談話、観察、手技であって、前教育要領の六領域に似たものであった。その頃も今も同じように、それらを教科のように教えると考える保育者、時間割に従って授業するという幼稚園が多かったようである。

先生のお考えはそうでないことは言うまでもなく、幼児のひとりひとりの発達に即した一さながらの生活。遊びを基本にした一生活を、生活で、生活へ一ということであった。

その実際を『五目ずし』に例えられた。五目ずしのおいしさは、その具、椎茸、干瓢、人参、蓮根、穴子などの一つ一つがおいしくできていて、それらがすし飯と渾然一体となって味わい深くなるのである。その上にのせられた玉子、のりなどの美しさとともに、具が別々にとり出されておいしいうでなくて『五目ずし』（生活）の中に渾然一体となった五つの具（項目）なのである。と言われたものと私は今も理解している。

小学校低学年で生活科が出来、総合学習ということがいわれているが、それもこのような考え方がよいのではないかと思っている。

倉橋先生はお講義のときはもとより、文章では「ことば」「文字」の使い方に変な配慮をされた。子供とかかれず子どもとされ、友達でなく友だちであった。

幼稚園保育法真諦が出されたのは私が付属幼稚園に就職した年の七月であって（初版の先生のご署名をいただいて私の宝物になっている。）その真諦という意味が序に記されている。

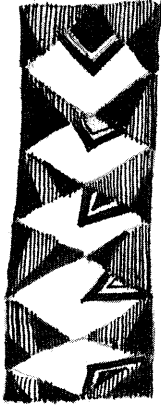
「保育法真諦とはわれながらおこがまし過ぎる僭称である。」との謙虚な言われ方、しかし「疑惑と

攻究と、又いつも付きまとう遅滞とを経て、やっとここに落ちついた考え方なのである。自分だけでは、少なくとも今のところ、これを真諦と信じている。」と。

諦、ということばの意味を何度か先生は説明してくださった。不勉強な、物わがりのわるい生徒であった私。その時かどうかわからないのだが「似ているけれど innocent と ignorant は大へんな違いですよ。」といわれた。兎にかく何もかもお見通し、でも決して相手をお傷つけるようなことはいわれなかった。「相手を尊重する」ことをご自分から示されていた。

それで「自分は○○主義ということはない。」と言われていたのに世間では自由主義者とみている人が多かったようで、殊に戦争中の風当たりは強かったのでは、と思う。自然主義者といわれておられたのもお講義にルソーの教育論を引用されたことからかとも察せられる。

「フレーベルの精神を忘れて、その方法の末のみを伝統化して……」と序文にもあるようにフレーベル主義というような、主義にこりかたまって広い視野を持ってないことのないようにと常に言われていたのが、かえって「八方美人」とのかげ口にもなったようである。



それにしても菊池ふじの先生が田村（大岡）薫さんのノートで勉強をなきったということは何とすばらしいことだろうか。菊池先生は私が学生の頃からあこがれの先生であったし、今も猶その思いは変わらない。田村さんとも数年同僚だったわけで、今更ながらこのような方々と朝夕をすごした日々のある我身の幸せを切に有難いと思う。

私の個人的なことであるが息子のひとりが反抗期（小学校上級〜中学生）で、事毎に母親（私）にたてつき、ほとほと手を焼いて先生にご相談したことがあった。「何せ、ああ言えばこういう、怒りたくなって、つい怒ってしまうのです。」と訴えたとき、「あなたがほんとうに怒りたいときは、人間として怒ったらいい。」と言われた。ああそうか、怒りたいときは怒ってもいいのだな、とうれしかったのだが、よく考えてみると簡単に怒っていいのではないのだ。と家に帰りつく頃にはじんと胸にしみる思いだった事を、その時の先生のお顔、お声とともに今でもはつきり浮かぶのである。それは、それから一週間後に先生が倒られたとのお知らせをいただいて、かけつけたのであったから……。

八坂富子 昭和七年卒

講義から学ぶ

今半世紀あまり前の茶色く変色した二冊の大学ノートを丹念に読みかえしながら私が歩んだ保育の道と重ね合わせて感無量のものがあります。

何か迷いが出たり、新しい課題に当面した時にいつも先生の保育の原点に戻ると心が安らぎ前進出来るのです。

第二章保育法の原理 1 自発の原理。2 具体の原理。3 活動の原理。4 社会的原理。

第三章保育法の原則 1 間接教育の原則。2 相互教育の原則。3 機会教育の原則。4 充足の原則。

5 生活誘発の原則。

第四章保育の方案 保育案。

時代が移り法令の改正を経過しても底を流れる思想は連綿と生き続けていました。

秋山ちえ子 昭和十年卒

倉橋惣三先生に教えられたこと

—— 若い未熟さを悔やむ ——

倉橋惣三先生から保育学の講義を受けたのはもう五十年前になる。五十年たてば大方の事が快い思い出となるか消えてしまうのに、先生の事を思うと今も尚身の縮む思いが抜け切れない。それは偉大な幼児教育学者の価値を知ることが出来なかつた学生時代を含めた二十代、三十代を深く恥じ入るからである。自分のものさしでしか相手を計れぬ若者の狭量さとそれを良しとする思い上がりじくじに忸怩たる思いなのだ。

先生は幼児の自発性の尊重を強調された。幼児教育にたずさわる者は腕のいい熟達した園丁の目と心を持ってと説かれた。その頃、教育は縦割りの管理下の中にあり、規律を教えこむことが第一とされ

た。そんな時、倉橋理論の実践の場であった東京女高師附属幼稚園では、子どもたちが自由に遊び廻る時間が尊重されていた。朝、幼稚園に来た子どもは、一人々々思い思いの遊びをはじめ。砂場に行く子、ままごとをする子、本を見たり絵を描きはじめる子、山を駆け廻る子等々。全員が朝礼をして歌ったり踊ったり時間は無い。一クラス毎に子どもたちの心の動きと流れを見て、教師はピアノを弾き、広い遊戯場でとんだりはねたり踊ったりすることはあるが。

一斉に号令の下に教えこむ仕事は一人の教師の手で容易だしその成果も適当に知ることが出来る。が、自発性を尊重となると、指導者の力量が問われるし、未熟な者は無責任になる恐れありだ。

が、附属幼稚園の場合、一クラス三十人の幼児に正規の先生と助手、それに加えて実習生とよばれる学生が四人配置されて子どもたちの言動を見守った。伸びようとすする芽をさがすこと、育成することとは、附属幼稚園という特別扱いの所だから出来ることと思つた。

しかし幼児の教育は小学生、中学生とは異なつたものであることを思うと、附属幼稚園のようであることが望ましい状態であるといえるように思う。倉橋先生はその実態を見せて下さつたが、私は現実には押しつけ附属幼稚園の姿は理想論としか見ないことが長かつた。

人間形成の基礎部分に大きな影響を与える幼児教育に対する倉橋理論を理解し出したのは、教育のあり方を広い視野で眺められるようになってからである。遅い目ざめ、後悔先に立たずという言葉を思わずにいられない。

倉橋先生に関してはもう一つの後悔がある。それは教師の人間性の豊かさの問題だ。

戦前、教師になる人は師範学校とよばれる教師養成専門の学校で教育された。戦後は教師は教える技術と同じ比重で教養と人間性が問われることになり、師範学校は廃止され、大学で教職を希望した者に短期間の教育実習が実施されて教壇に立つ制度になった。

倉橋先生は教師の人間性を考えておられた。講義の中で歌舞伎の出しものや役者の話、文学の話をよくされた。学生によく声をかけられた。そんな時、感情の起伏の激しい女子学生の神経は刺激を受けた。「××さんの肩に手をかけて話をした」「女形の話はいやらしい」等と囁きあった。若い女子学生にとって倉橋先生の印象は幼児教育理論の講義より他の要素の方が強かった。こうしたことはすべて教師となる人間にとって、教える技術よりもっと大事な豊かな人間性があることを考えておられることと気づくまでに可成りの時間がかかってしまった。その上、私はクラス代表として「教室の神聖を汚すようなことはしないでほしい」と抗議に行くという念の入ったニガイー思い出まであるのだから救いがない。

戦後間もなくラジオで先生と対談することになった時、事前にお宅に伺って学生時代の未熟さとその言動を心からお詫びした。

「若い者はいつの時代も同じこと。あなたも年をとったということだろう。幼児教育が物を云うのはこれからですよ。がんばりなさい」といわれてほっとした。が、今も私の心の片隅に倉橋先生に対する忸怩たる思いが拭い去れないでいる。

私はTBS系のラジオ番組で毎日、三十二年間話し続けている。四月半ば九千回になった。その中

で度々話すことは、「マンション住まいの人もプランターで小松菜、春菊等簡単に出来る野菜を育ててごらんさい。」ということである。

太陽の光、水、肥料で野菜は育つが、すべてやり過ぎても少なすぎても駄目。程良い水やりと肥料の与え方、太陽の光に注意することでのびのびと育つ。これは子育ての心に通じると話しながら、いつも倉橋先生のいわれた自発性の尊重と園丁の目と腕と心という話を思い出している。

偉大な教師に心から感謝したいと思った時、先生は私がお話できない所に行かれてしまっていた。こうした後悔をくり返しつつ年を重ねている私である。

鈴木貞子 昭和十年卒

先生の講義を、女学校を出たばかりで予備知識も無しでお聞きしたのは、誠に勿体ないことで、その真意は後年になって気付くことが多々ありました。

何十年も経た今日、先生のお言葉は生き生きとよみがえり、何時の時代でも、真実を語りかけて下さいます。

「幼児は丸くて柔らかくて、つゆのように輝き、傷つき易くこわれ易いもの。順風に吹き寄せられる帆かけ舟のように寄ってくるもの。」保育者の心くばりを考えさせられます。

先生の提唱された水曜会は、今川焼やお団子で楽しみ、人間関係作りの大切さを学びました。その後、年2回のクラス会として続いております。

堀合文字 昭和十四年卒

倉橋先生の思い出をとのお話に、私にとって思い出ではないのです。今も私の中には先生がいてくださるのです。ですからここまでこられたのだと自分自身自負し、信じております。

昭和十三年の学生時代に授業を受け、何が何だかわからなかったその頃も夢中で話を聞き、いや、お話の中に引入れられてしまい、アハハハ……と笑いころげている中に時間が終わってしまいノートを整理をし勉強する時は何と伺ったのかノートがとれず試験には困った事を覚えています。

いざ、現場に入り、遊びが大切、遊びが大切と自分を無にして自分に言いかせて遊びの中で幼児教育をやってきた一言につきます。

戦後、認定講習という会が諸々に開かれ、お茶の水女子大学でも開かれました。その時は戦後物資の乏しい頃でノートもあまりなく小さなノートに鉛筆でかき、今見ると黒くこすれて読みにくい位の筆記ノートをとりました。

それは当時の新教育の幼児教育法の解説から始まり質問形式になっております。

戦後は私も、毎日の計画があつて時間がくると今日の計画を経験させるために「○○の組お入り」と子どもたちを自分たちの前に集めてやって平気な時がありました。子どもたちの遊びをよく見る時、「何かおかしい」「これでよいのか」との自問自答の末いつもそのノートを何度も読みました。

幼稚園真諦も読みました。読めば読む程、何か違う。倉橋先生はもっともつと自由（正しい自由）をさげんでいらっしやるのではないかしら。現場で実践する私共保育者がそれを実践してゆかなければ

ばいけないのではないかしら。何か違う。そのたびにノートと真諦を何度くりかえし読んだ事でしょう。読むたびに私に何か違う事を教えてくださるのです。今やっている自分の保育、又周囲をみまわしてみられる保育の実践とは違う事をこの本から教えてくださるのです。

「広っぱへいってあおむけにねて、大ごえでみんなでさげんでごらんさい」という事を伺った。その中には色々な意味があります。

こんな間々の中に幼児の生活をこわさないでその中で教育しようと覚悟して我々が生活へ出かけていく事にしました。約二十年前になるでしょう。種々の問題もありましたが現在ある私も、倉橋先生のいろいろのお言葉が私に教えてくださった結果です。

それが現在のこの世の中に生まれ育っている幼児たちに大切な幼児教育の実践となってゆく事は今更のように倉橋先生の教えに敬服しております。

唯、時代は流れ、子ども達は日に日に変化しているのが現状で倉橋先生の保育原理を根底において、前と同じ様に実践するのではなくて今の子ども達にあった教育を作り出してゆく、それも言うまでもなく一人一人皆ちがいますのでその人にあった教育をしてゆく事こそ倉橋先生の教えをうけたものの一人として使命であると感じております。

時代時代、一日、一日違っている事、教師がその人の教育をその場で考え出す事これこそ倉橋理論が現在に生きている事ではないでしょうか。

終わりにすり黒くなったノートの一部を記しましょう。

幼児の生活形態と言う事。

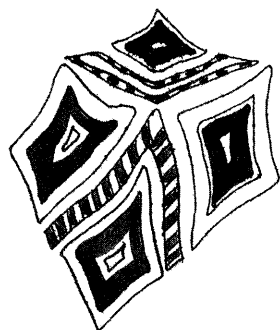
〔例〕 金魚は水の中にいる。それが泳げるべき形態である。泳げる事が金魚に対する場である。

蛍を愛する人あり、美しき籠に入れて鑑賞する光る蛍を光らせるためにたいたたり、水をかけたりするが蛍は光るものでなく、飛んでいるものであります。

幼児を一部屋に集めて、これからお話をするから聞きなさいと言うのは幼児の生活形態ではない。形や目的方法は先生の考えによって考えられるが場としての生活形態が出来るだけ自然のものでなければならぬ。

(こういう人あり、幼児を教育したいと思い、お話はこういう風に唱歌はこういう風にと思いうけれど幼児を入れておくのは彼等は幼児そのものの目的、形、目標をもってゆく。と言うの感心なり、いわゆる出かけ保育なり)

幼児はその目的を達してもらうために、その方法を達してもらうために特殊なる場所におかれたいのであります。



幼児の生活をそのままにしておいて我々の目的目標を達成するのがよいと思います。

出来るだけ幼児を生活の場たらしめたい、どんな教材をとおもう前にすべき事でありましょう。

保育を受けるにふさわしき形態におくに止まらず、自ら自身の生活ができる幼稚園としておきたいものであります。……以下略……

教育の本質が行われてゆく上に子供と貴女との関係が如何かと言う事が大切な事。

○子どもを愛する人。保育の方法をする前に子どもの身辺の世話をする事が第一で、……中略……子どもに心あり、こちらの誠意は必ず子どもに通じる。……中略……

○子どもと共鳴しなければならぬ。

幼児はいろいろ心理を持っているが、たえず感興（興味）を持って生活している。その興味はすべてにおいて新鮮なり。驚きがすべて、響きがすべて、想像的、空想的なり。……中略……

共鳴できる先生はうれしい先生で共鳴するのが一つの使命なり。共鳴する事は子どもに切なる事で、我々は教育者なるがために子どもの中に何かを発見しなければならぬ。……後略……

以上筆記の一部にすぎず、前後がないと理解しにくい所もありますがすべて大切な大事な言葉であった事を改めて明記しておきます。文部省からの今回の改訂もすべて倉橋理論及実践が根底にある事は私にはわからないながら自分なりに信じております。理論は理解する事は誰でも出来、言える事と思いますがそれを実践する事はむずかしい事という事も痛切に感じ、保育者は努力しなければいけない事も深く感じます。

相馬誠子 昭和十五年卒

「今、いさる先生の教え」

倉橋先生は、何時どこでも、誰にでも静かな暖かい笑顔で接しられ、心豊かな親しみ深いおじさまとも感じられた。二限にわたる保育の講義も、あつと云う間に終わる程、実演まじりの楽しい授業!! 笑いほうけているうちに、保育の真髓が次々と話され、あわてて真剣に記録をとる。その一言々々には、今でも感嘆せざるを得ない。『教育は人情の発露である。人情を土台として研究あり、設備あり、方法がある。』のお言葉には、私の人間性を問われている気がして反省した。又『子供にとって最も幸せなこと、教育として最も肝心なことも、我ら自身を与えることである』この事は、経験を経るほど、深い意味として私の心に刻まれている。又『園丁は花園に潤いを絶やさないうため、一滴の水も与え盡す。又じょうろに水を満たすためには、潤いのもとを絶えず汲み取らなければならない。しかし、潤いを要求している幼児に対して、すぐ涸れ易いのは私達の心である。私達は常に潤いの汲み手であり、与え手であること。そのためには、自ら進んで、美しい自然、音楽、芸能、美術に接し、自らの心に潤いを蓄えるようつとめなければならない。』この教えには特に共感を覚え、努力して来た。又『保育者は子供のために化粧をし、おしゃれをするように』薄化粧による自然美、色彩に調和のとれた品のある美は、良い美的感覚を育てるからだ。この偉大な倉橋先生にご指導を頂いた幸せを心から感謝すると共に、自分自身に一層の磨きをかけるよう努力し、先生のご恩にお報いしたいと思っている。

みんなで作ったかえうた、(二番) さあご一緒に歌いましょう。

♪ ふたつと出たワイのよさホイのホイ!!

太い倉橋御大のホイ!!

あとにヒヨコヒヨコついていくホイホイ!!

野辺繁子 昭和十五年卒

幼稚園は教育するところというより、子どもにとってはパラダイスであり、対象は幼児であり、その発達段階の個人差をふまえ、個々の自発性を大切にすることが大切である。また私共は、幼児の発達をケアする人にならねばならず、保育者である。

朝、登園児が一人でも門をくぐった時から、保育ははじまり、最後の一人が降園するまでが保育であり、保育者は幼児と共に楽しく遊びに加わりながら、降園前には十分な時間をとり、落ちつき、全員が紳士、淑女になって帰るようにする。保育終了後は、幼児一人一人の遊びの活動を記録する事により、個々の個別指導ができるようになるものだ。

幼児の生活は遊びであり、それは必ず、幼児の自発的な遊びでなくては充実感を持ち、又楽しいものにはならない。大人が勝手に計画し幼児を引きこんだものではなく、ひとり遊びから、個・団・組と楽しく遊んでいるうちに移行していくものである。

子どもの活動を見守り保育者のケアが必要な場をみつけて欲しい。

保育課程ではなく過程となさった御気持ちがよく分かるように思います。

菊地明子 昭和二十四年卒

マーブル先生は大理石のような先生、整って美しいが冷たいのですよ。温かさが第一。

お化け先生は白塗り、赤塗り子供はびっくり。(過剰なお化粧のいましめ。)

昭和二十三年春。実習科遠足の話し合い。○生「江戸川の土手はうらうらといい気持ちです。」「そう、うらうらとねえ。」とリズムカルに反復なさった先生の声が耳に。話を受容的に聞くことを教えられました。

実習生の前日、砂場の掃除をしながら「ヤマノミナサン……」と仕方話的に歌を身振表情まじえ口ずさんでいたら、何と先生がニコニコと後に……。カーッと血が上り金縛りにあった私。私の小さな秘め事。

ご多用のところ原稿をお寄せいただきました方々には、心から御礼申し上げます。

尚、倉橋先生をめぐって、お話をお聞きしたい方が無限におられますが、紙面の都合上割愛させていただきますことお許し下さい。(編集部)



ごっこ遊びっておもしろい

田村 玲子

はじめに

二月三日、私は警察ごっこを始めた男児（五歳児）二人に、泥棒役を頼まれ、その遊びに加わりました。その日、部屋では他に、四人の子どもがままごとコーナーでお母さんや赤ちゃんになって遊んでいました。また、五人の女児がベープサート用のベニヤ板のボード（下図）の裏で、人形劇の道具を作っていました。

警察と泥棒を中心にしたこの遊びに、回りの子どもや遊びは、様々な形で関わったり、つながったりして行きます。そして、そのストーリーは、子どもからの発想によって次々と展開して行きました。その中で、自分達だけで遊びのイメージを共有し合ったり、自分と相手のイメージをつなげたりしている子ども達…。

泥棒役として一緒に遊んでいた私は、そんな子ども達の持つ発想や力に、感心したり、驚いたり通しでした。



そして「ごっこ遊びっておもしろいなあ」と心から思ったのです。

そこで今日は、この「警察ごっこ」の活動記録をもとに、私を感じた「ごっこ遊びのおもしろさ」について、いくつかお話したいと思います。

警察ごっこについて

△登場人物紹介▽

警官……健太^{けんた} 幸治^{こうじ} 婦人警官……佳子^{よここ} 志保^{しほ} 警察犬……男児二人 ままごとのお母さん……裕佳^{ゆか}
赤ちゃん……男児 かくまう人……泰佳^{たいか} 知佳^{ちか} 泥棒……私（直接、関わった人のみ）

△警察ごっこ始まる▽

健太と幸治が積み木で囲いを作り、またブロックでピストルと無線機を作って、警官となります。佳子と志保も婦人警官として仲間に入り、四人は無線機で「応答せよ」「泥棒はいたか」などと互いに連絡を取り合っています。

△泥棒登場！▽

子どもからの要求で泥棒となった私は、ままごとコーナーから犬のぬいぐるみを盗んで逃げます。泥棒はしばらくの間、部屋の中や外などを警察に追いかけられた末、捕まって、積み木の牢屋に連れて行かれます。

△不思議な警察犬▽

牢屋には二匹の警察犬がおり、泥棒の私に向かって「ワンワン」と吠えながら、足にからみついて来ます。けれど、婦人警官の佳子が「この犬は頭でなでるとやさしい犬になるんですよ」と言うので、私はその通りにやってみると不思議や不思議、今度は「クーンクーン」と甘えて来ます。そこで私も安心して牢屋に入ります。

△警察の、ままごと訪問▽

健太と幸治がままごとの部屋に行き、「警察の者ですが、この頃、誘いが多いのでお宅の赤ちゃんを警察で預かります。」と話します。そして、赤ちゃんはよつんばいで警官について行き、その後、お母さんの裕佳は、警察にいる赤ちゃんの所へごはんを届けに行きます。

△脱走した泥棒に「隠れていいよ」▽

しばらくすると、婦人警官の佳子が積み木のすき間から私を逃がし、再び泥棒対警察の追いかっこが始まります。しかし今度は、すぐに捕まってしまうわけではなく、人形劇の道具を作っていた泰佳が、ボードの裏に私をかくまってくれます。警察が聞きに来て、**「知らないよね」**と言って、そばにいた佳佳と目くばせをしています。

△内緒で片付けよう！▽

警察がいなくなったすきを見て、また逃げ出した私：
…ところが今度はピストルに撃たれて、床に倒れてしまいます。こうなると、いつもなら、誰かが生き返る薬をくれたり、**「十数えたら生き返れるのね。」**というアイデアを出したりするのだが、この日は待っても待っても救いの手は差しのべられませんでした。それでは、子ども達は一体何をしていたか、と言うと「内緒でさ、部屋ぜんぶぎれいにしてびっくりさせよう。」と声をかけ合っているのです。そして、担任の私が目を閉じて横たわ

っている間に、部屋を片付け、降園前の集いができる様にいすを並べていたのでした。

△不思議な結末▽

更におもしろいことには「もう起きていいよ」と知らせに来た佳子が、私に「『一体、俺はどうしていたんだ』って言って」と頼んだのです。私はその通りに言ってみると、佳子は「ピストルに撃たれて死んでたんだよ。知らなかったの？」と言い、私も「うん……覚えてないなあ」と答えます。初めは二人のやりとりを不思議そうに見ていた回りの子ども、記憶を失った私に「泥棒だったんだよ」と教えてくれます。私も「そっかー、知らなかったなあ。何か泥棒みたいに走っていたのは覚えていないけど……。」と答え、子ども達と一緒に「不思議だねエ」などと首をかしげ合いました。そして、どれだけの子どもが、この『最後のうその世界』を理解しているのか、私にもわからない、という不思議な雰囲気の内、降園前のおかえりの集いの時間は始まったのでした。

警察ごっここのストーリー展開

先にもお話ししましたが、この警察ごっこでは子ども
の発想によってストーリーが展開して行く場面がいくつ
かあります。例えば、泥棒という役割を登場させたり、
牢屋に入れられた泥棒を逃がしたり、泥棒をかくまった
り……というのも子ども達^が自分で思いついたことであ
り、その時の子ども^のとる行動は様々です。が、その行
動は大別して、二種類に分かれることに気が付きまし
た。そこで「ストーリーの流れが変わる時の子どもの動
き」の二つについて、それぞれ具体例を挙げながらお話
ししたいと思います。

1 一つ目の方法について

。泥棒になった私は、逃げている途中、警官の健太と正
面から出会い、ピストルを向けられました。そこで私は
「もうダメだ」と手を上げてつつ立っていました。健太
が私を撃つか、捕まえるかするだろうと、待っていたの
です。でも健太は何もせず、それどころか「先生、この
すきに逃げていいんだよ。」と自分の横を指さしたので

す。私は、「彼はまだ単純な追いかっこを楽しみたか
ったのだ」と気付き、「あつ、そうなの。それじゃあ、
このすきに……」と言いながら逃げたのでした。

。私が、警察犬がわんわん吠えている牢屋に行くと、婦
人警官の佳子が「ねェねェ、この泥棒は犬が嫌いな泥棒
なのね」と案を出しました。そこで私も、その言葉に合
う様に「助けてくれー。俺は犬が嫌いなんだ」と怖がっ
たのです。

この様に、子ども達は警察ごっこで演じていた役割を
離れ、健太は健太、佳子は佳子という「自分」に戻って
います。そして戻った上で、相手に了解をとりながら、
ストーリーを変化させる様なアイデアを言葉にしている
のです。

2 二つ目の方法について

。泥棒の足からみつく警察犬に向かって、婦人警官の
佳子が「こら、おとなしくしていなさい」と言い、泥棒
に「この犬は頭をなでるとやさしくなるんですよ」と教
えてくれます。泥棒がその通りにすると、犬も「クー

ン」とすり寄って来るのです。

。警官の健太と幸治がままごとの部屋を訪問し「この頃、誘いかいが多いので、お宅の赤ちゃんを預かります」と話し、お母さん役の子も「はい、お願いします」と赤ちゃんを預けます。

この様に、婦人警官は婦人警官のまま、警官は警官のまま、という具合に、子ども達は警察ごっこの中の役割を演じたまま、一つのセリフとして、ストーリーを変化させるアイデアを出しているのです。

さて、この警察ごっこでは、この二種類の子どもの動きが、これ以外にも数多く、入れ替わり立ち替わり現れて来ます。子ども達は突然、現実の自分にかえったり、遊びの中の役割に戻ったりしているのです。不思議なことに、それでもトラブルはなく、不自然な感じも残さずに遊びは続けられて行っています。

では一体、それはなぜなのでしょうか？どうしてそんなことができるのでしょうか？

この遊びは生活経験を積んだ五歳児の遊びである、という年令的なことを大きくふまえながら、この理由について考えてみたいと思います。

一つには、子ども達はもう既にだいぶ、自分の考えを相手にわかりやすく伝えることができ、相手もまた、それを聞いてその考えを理解できるからだと思います。また、回りの人の動きを見ながら、その人の気持ちややりたいことを察知でき、自分もそれに合った様に行動できるようになっているのです。

そしてもう一つの理由は、子ども達の中には「自分達はつもりの世界で遊んでいるんだ、作っているんだ」、「すなわち「ごっこ遊びをしているんだ」という暗黙の了解があるのではないか、ということ。だからこそ「遊び」の世界から現実の自分にかえっても、またすぐに「遊び」の世界の役柄に戻れるし、相手が「つもり」でやっている行動に、自分も「つもり」のままて応えられるのだと思うのです。

五歳児においては、この暗黙の了解を理解し、実行で

きるということが、ごっこ遊びの仲間にもスムーズに入り、関わるための重要な要素になっているのではないのでしょうか。そして、これらが叶っていたために、この警察ごっこも、おもしろく、不思議に展開して行ったのだと思います。

ごっこ遊びのおもしろさ

初めは小さなことから始まったごっこの世界に、次第に様々な子どもが関わって、互いにイメージを共有し合おう。それによって更にイメージが広がって、遊びもどん



どんと広がって行く。……今回の警察ごっこに限らず、ごっこ遊びではこの様にして遊びが楽しくなって行くことが多いのではないのでしょうか？また、子どもが自分以外の、他のものになって遊ぶ時（例えば警官や看護婦、ドラえもんなど）、それまではあまり一緒に遊んだことのない友達同士が、自然に関わったり、「女と遊ぶなんて恥ずかしいよなあ」などと互いに言っていた男の子と女の子が、何の抵抗もなく一緒に遊んだりする姿を数多く見かけました。それから、看護婦さんの所に「おなか痛いですけど」と診てもらいに行ったり、ままごとの部屋に「ピンポン」と行ってお客さんになったりと、他の遊びに比べると「入れて」などの固苦しいやりとりなしに、仲間が増えて行くことが多い様に思います。

では一体それはなぜなのでしょう？

子どもは自分以外のものになることで、「やってみた」と思いながら普段はできない想像のことをしてみるので。また、見たり聞いたりして知っている、大人などの行動の再現をしているのです。それが、警察になっ

て泥棒をつかまえ、ピストルを撃つことでもあり、お母さんになってごはんを作ることでもあると思います。

また、自分が違うものになることで、自分以外のいろいろなものも、違うものにしてしまう、想像する心が生まれ広がるのではないのでしょうか？例えば、積み木の囲いは牢屋となり、ブロックを組み合わせたものも、ピストルや無線機にと素敵に変わってしまいます。そんな「想像する心」は人間（友達）に対しても同じ様に作用するのではないのでしょうか？「あんまり遊んだことないから」「女だから」などという、それまでの先入観やこだわりをはずして、友達のことを見れる様になるのだと思います。きっと、普段より心が開かれているに違いないのです。だから、ごっこ遊びには様々な子どもが関わることででき、遊びも楽しく広がる…私はそう思うのです。

これからの課題

ごっこ遊びは子どもの心を大きく柔かく開く…そんな風に考えていたら、私にとってごっこ遊びはますます魅

力あるものになって来ました。そして…

。ごっこ遊びを通して子ども達が学び取るもの、子どもの中に育つ心は、もっともっと教え切れない位あるのではないか？

。想像する心や柔軟なイメージ、心が開かれることは、子どもにだけでなく大人にとっても、とても大切なのではないか？ 大人の私がごっこ遊びをしていて、とても楽しく心が開放されるのは、その辺のことと関係があるのではないか？

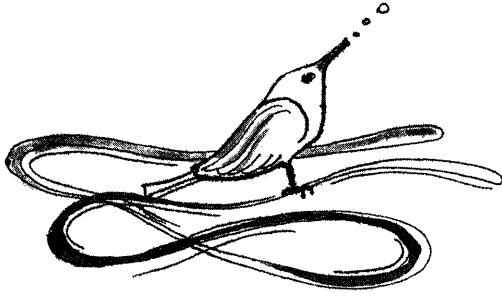
。だとしたら、幼児期から成人への成長過程をふまえて、もう一度「ごっこ遊びの大切さ」を考えてみたい。

等々、私の中のごっこ遊びへの興味は尽きません。時間は長ーくかかっても、子ども達との遊びを楽しみながら、これからもごっこ遊びのおもしろさの一つ一つ探ってみたい…そんな風に思っています。

（横浜学園付属元町幼稚園）

リズム遊び

——戸倉ハルの作品を通して——



吉成 啓子

はじめに

「現代の子どもたちは、情緒・情感に乏しい。」「思いやりが欠けている。」などという会話を耳にすることが多くなってきた。

子どもたちが、自然の遊びの中で歌を唄い、音楽を聞き、その感動をからだで表わすことができるように導くことができ、「リズム遊び」の楽しさを味わせることができるならば、豊かな情緒・情感が培われ、養われていくことは必定のことである。その大事な時期は幼児期にある。幼児期の「リズム遊び」が重要な役割をもっていることは、説くまでもないことである。それをあたえることのでき

るのは指導者（教師・保育者）なのである。それらを行おうとする時、まず、どのようにしむけていったら良いのか。など、さまざまな問題につきあたってしまうことであろう。本稿では、問題点の解明をねらいとして、戸倉ハルの作品を指針とし、その考察を進めていくこととする。

戸倉ハル先生（一八九六―一九六八）

まず、先生はダンスについてどのように考えておられたのか、その考えの根底にあるものを知りたいと思う。

先生の作品は、幼児から大学生に至る幅広い範囲を対象として、数多くのものが残されている。特に、幼児、児童のためのものが多い。

先生が、子どものためのダンスの研究に取り組み、その本格的な研究をはじめたのは、旧東京女子高等師範学校（現在、お茶の水女子大学）の研究科に入った時からということが出来る。研究のスタートは、大正十三年に旧府立第六高等女学校（現在、東京都立三田高等学校）

の教師になった時からであった。大正十四年七月、日本幼稚園協会主催の講習会で、ご自身の創作作品として、幼児の遊戯「みなさん、あした、また」「しゃぼんだま」「ゆうやけこやけ」などを発表したと記録されている。これらは現在も親しまれている傑作である。

先生は、この頃より幼児のダンスに情熱を傾けられていたのであった。その後、昭和八年、旧府立第六高等女学校から旧女子高等師範学校に着任され、ますます、研究は深められていた。

先生の考えが具体的に示されたのは、昭和十一年六月発布の第二次改正学校体操教授要目であった。その時先生は、要目調査委員として、この要目の教材選定にあたられた。従来の要目中の唱歌遊戯および行進遊戯は、小学校では僅かに十三種であったが、この要目では、それぞれが十八種ずつに増加され、多彩な教材が盛りこまれたのであった。更に関連して同年七月に発布された学校体操教授指針では、次のようにその目的を明示された。

「唱歌遊戯及行進遊戯は、音楽の伴う全身運動によ

り、身体の發育と健康とを助長し、容姿を端正にし、動作を優美ならしめ、兼て快活温雅な精神を養い、以て心身ノ調和的發達を図るを目的とする。」また、

「唱歌遊戯及行進遊戯は、特に女子の体育運動として適切であることが最も大きな特徴であつて、身体の發育、健康の増進を図るに効果があることは勿論であるが、これと共に、快活優雅な感情を陶冶することにおいて独得の特徴があるものである。」と、その特徴を明らかに示された。この考え方は先生の基本的な考えであり、その後、少々作品の傾向に変化がみられても考え方の根底にあるものは変わることがなかったのである。子どもの情操陶冶には、音楽は欠くことのできないものであるという強い信念のもとに、音楽に合わせて踊ることの楽しさを経験する場をあたえることにより、運動面のみでなく心情面をも培い育むことができる」と力説されたのである。「幼稚園に於ける唱歌遊戯」〔師範大学講座体育〕第十一卷（昭和十一年三月）には、幼稚園の唱歌遊戯の目的、その位置づけを明らかにされ、具体的に

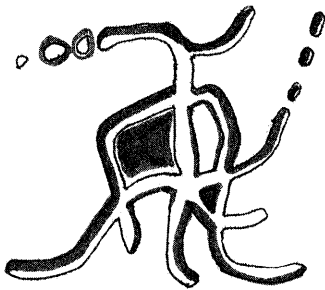
教材選択上の注意や指導の方法、指導案などを記述されている。

戸倉ハルの指導観

(一) 子どもの自主性を大切に

次頁参照の資料(1)は、先生が発表された幼稚園に於ける唱歌遊戯創作への指導案である。教師の巧みな誘導が、子どもとの言葉のやりとりにかがわれ、むりなく自然に子どもの表現が引き出されていることがわかる。

教師は、題材について子どもの関心を高めるための導



資料(1) 幼稚園に於ける唱歌遊戯創作への指導案

(戸倉ハル「幼稚園に於ける唱歌遊戯 P21～29」から)

一、お花畑

- 一、題材 お花畑
- 二、時 五月の暖かい日
- 三、所 校庭の緑濃く生えしげつてゐるクローバーの上

四、指導の実際

教 今は春の真最中で、野も山もいろ～な草花が咲いてみて大変綺麗ですね。今日は皆さんめい～お好きなお花になつて遊びませう。○○さん、あなたの一番好きなお花は何んですか。

児 チューリップ

教 ○○さんあなたは

児 バラ

教 ○○さん、○○さん……

児 カーネーション、タンポポ……

いろ～の答えの中でチューリップが一番多かつた。

教 それでは○○さんはチューリップ ○○さんはバラ ○○さんはカーネーション ○○さんはタンポポ……とめい～自分の好きな花になつていた、きませう。

この時子供は思ひ～に自分の好きな花になつて喜びいさんである。大変綺麗なお花になりました。その綺麗な花はすぐさう大きくなつてお花になるのではなく、小さい、細かい種子を畑に播いて、可愛がつて育て、やるのですと、播種から生長して花が咲くところまでを話す。

さあ、これから種を播きますよ。

種を播く様子をする。

さあ、一番先にチューリップ、バラ～

児 チューリップになつた児はうづくまる。

教 次はカーネーション。

児 今度はカーネーションになつた児がうづくまる。

教 次はタンポポ その次はバラ……

児 タンポポ バラ……と順々にうづくまる。

教 これで播き終わりました。こんどはその上に軟かい土を冠ませませう。

児 子供は皆一斉にうづくまつてちつとも動かない。

教 お水をやりませう。ジャブ～

児 ムク～動く。

教 暖かいお日様がボカ～あたるので種子が急に大きくなつて芽を出しさうになりました。

児 子供は盛んに動き出してだん～頭を抬てくる。

教 元気な青々とした芽が出ました。

児 子供は全く立ち上る。

教 花が咲くやうに大きくなりました。蕾が出来たものもあります。いつの間にか綺麗なお花が咲き初めました。

児 子供らは、いろ～工夫を凝して花を咲かせます。体前で、肩先で、頭上で、大きいのもあれば小さい可愛らしいものもある。皆両手を合せることは同じである。

教 あんまり綺麗なので、蝶々が見つけて飛んで来ました。皆さん、こんどは蝶々になつてごらんさい。

児 誰れも両手を側にあげ、軽く上下に振りながら前へ歩く。

教 この時、鳥の飛ぶやうな表現が多いので、蝶々はもつと静かに可愛らしく舞ふのですといつて蝶々の舞を共同研究する。一人づつやらせる。それを共同して批評する。大分よくなつて静かにのどかに舞ふ姿をさせる。

児 皆な軽く舞ふやうになつて可愛らし。

入の工夫が大切である。興味をもたせるための身近な話題を捜し話をする。そのことについての観察をする。絵を画いたり歌を唄ったり、さまざまな方向から導入を行いながら題材の要点の指導を行う。など、指導者として大切なことは、子どもたちが自由に動きを創りだし自然な表現をするように、助言をする位にとどめ、創造の余地を子どもの領分として残しておくことを忘れてはならない。また、あくまでも本質をこわさぬよう、個性を伸ばすよう、子どもの中から動きを引き出すことが肝要であることを説かれている。「教育とは教えるものではなく、子どもの持つ、すくすく伸びる本性を啓培して、それをうまく引き出すことに真の生命があり価値がある。」という先生の言葉は、指導観そのものといえる。

「子どもの自主性を大切に」という指導観は、当時発刊されていた『幼児の教育』にのせられた倉橋先生との会話にも裏つけされている。

倉橋惣三氏の言葉

「遊戯は、もっとと素朴で簡単に一刀彫のようでありた

い。もっとと自由表現の余地をあらしめたい」

これに対して戸倉先生は、次のように答えられた。

先生のお言葉は、実にあの素朴な子ども心そのものを表現するようにと、指示せられたものとして、私の胸に喰い入った。——中略——遊戯の動作なるものは、誰が作りだすよりも子どもらの自由表現に待つべきであると思う。——中略——皆様も子ども達に教えるという事よりも、子ども達にらくらくと自由に表現させる志向を起こさせる事こそよき指導者、よき保母であると思う。子ども達の前で踊るのも遊ぶのも、つまりは、子ども達にその志向を湧出させる様のほんの手引きとして示されるにすぎない。その心を常に忘れてはならないと思う。

(『幼児の教育』——幼児の心にかへりて——)

こうした指導が行われた時こそ、「生きた指導」といえるのではないだろうか。

(二) 指導者も子どもになりきる

指導者が子どもと同じ立場になることは、子どもの気持ちを理解し、子どもが「そのものになりきる」という

しゃぼんだま

ゆかいに ♩ = 72

野口雨情 作詞
中山晋平 作曲

mf

mf

1. しゃぼんだま とんだ やねますで とんだ
2. しゃぼんだま きえた やねますで きえた

やねまめで とんぐに こわれで きえた
た

かぜかぜ ふく なしゃぼんだま とぼそ

資料(2) (「子どものうたとリズム遊び・花の巻」より)

しゃぼんだま

歌い方について

1. 全体として、明るく軽快に歌いましょう。
2. この歌曲は、大正9年に発行された「金の船」に載せられてから、ずっと幼児に親しまれて歌われてきました。今では「ドドドレ」と歌われていますが、その当時は、「ソドドレ」と歌われていました。しゃぼん玉をとばして遊んでいる歌で、大きなしゃぼん玉、小さなしゃぼん玉がふわふわあがっていく様子がよく歌われています。
3. 前奏・後奏は、特に軽快にリズムカルにひきましょ。 「かぜかぜふくな」のところは、ピアノの伴奏がありません。ことばをはっきり楽しく歌いましょう。
4. 曲について
調子…ニ長調 拍子… $\frac{2}{4}$ 拍子
音域…ニ～ニ (8度) 速度…♩=72
なおこの作曲は大正2年になっています。

あそび

準備 しゃぼん玉になる子どもを全体のきぐらいに決め、自由体形。

方法

前奏 4小節

そのまま聞く。

1. しゃぼんだま とんだ やねまで とんだ やねまで とんで こわれて きえた

しゃぼん玉になる子どもは両手を頭上に伸ばしてまわるとり、好きなほうに走り、最後に柱、机、いすのところで両手を降ろして、しゃぼん玉が消えた様子をする。他の子どもは、左手に石けん水のはいた器を持った様子をして、右手の五指を動かし、しゃぼん玉を飛ばす様子を4回する。

2. しゃぼんだま きえた とばずに きえた うまれて すぐに こわれて きえた

しゃぼん玉の子どもは前のまま待っている。他の子どもは、前の動作を繰り返している。

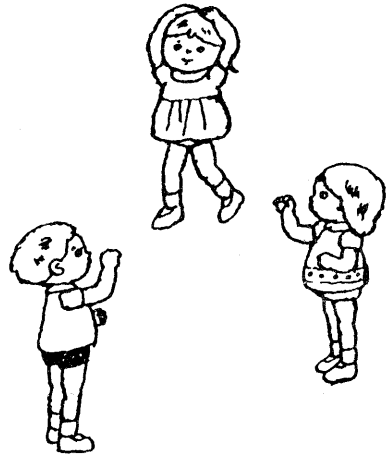
かぜかぜ ふくな しゃぼんだま とばせ
しゃぼん玉の子どもは他の子どもも、風になって好きなほうに走る。

後奏 4小節

好きなところに止まり、しゃぼん玉を作って飛ばす様子をする。

指導にあたって

- しゃぼん玉について話し合いをする。
- しゃぼん玉になる子ども、作って飛ばす子どもの表現は、それぞれくふうさせる。
- しゃぼん玉が消えるところは自由にさせる。もし途中で他の人とぶつかったら、すぐ消えるようにしてもよい。



ことへのよい助言者になれることである。子どもになり
きることによって、自然な表現を引き出すことができる
ということと言を強くして述べておられたのである。

戸倉ハルの表現創作について

(一) 題材

題材選択には子どもの生活経験を重要視すること。経験をしたか、しないかがまず大切になってくる。自然環境の中で、生活の中で、興味を十分に引くことができる題材であるかなどを念頭において選択すべきであるとし、題材の種類……自然界の現象・動物・植物・人物などがあげられている。

(二) 曲

「子どもの情操陶冶には音楽がもっともよい」という信念に基づいて、曲には細心の注意をはらわれた。

ダンスの曲には、詩のあるものと曲だけのものがあるが、先生は好んで歌曲（詩のある曲）を用いられた。

選曲は文部省唱歌、わらべうた、童謡と広範囲にわたっ

ている。

「美しい詩と美しい旋律に恵まれた歌曲は、こどものダンスを創るよい要因となる」と述べられている通り、よき理解者であった小林つや江氏をはじめ、服部正、渡辺浦人、小谷肇氏などの作曲家に作曲を依頼し、創作の曲となさった。また、先生ご自身の作詞に作曲を依頼して、模倣遊びやリズム遊びなどを数多く創られている。

歌詞は、短いもの。リズムカルな言葉のもの。呼びかけのもの。母音の多いもの。動物や動くものから取材したもの。子どもの生活をうたにしたもの。などを選び、曲は、音域の狭いもの（一〜六度位）。四〜八〜十二小節ぐらいの短い曲。拍子は二拍子型。繰り返しの簡単なリズムが良い。など、創作にあたり、子どもの歌曲にとって大切な要点を詳しくあげられている。

選曲されたものを子どもにあたえる時は、まず理解しやすいリズムを選び、拍子を子どもに十分に感得させる。次にリズムに言葉をつけてみる。次にメロディーをつけ、心に感じたものをからだで表わしてみる。つまり

「心にあるものをからだで作文するのだ」と述べられている。(子どものうたとリズムあそび『雪月花』より要約)

(三) 動き

動きはできるだけ大きく、のびのびと全身運動ができるように、簡単な動作で、子ども達が何度でもくり返して動きたくるように振りつけられた。大きな動作をすることで、子ども達の活動欲求が満たされ、楽しみをみい出すことができるようにと心を配られたのである。

先生の表現法は、音楽の分節に合わせて動作が振りつけられており、子どもが表現しやすいように創られ、
「そのものになりきる」そのものの心になる」

ことを強調され、こまかい表現の工夫より、のびのびと無邪気に行うようにと指導されている。

「詩の心、曲の想を生かして、リズムに重点をおき、一刀彫のような単純で技巧のないもので、しかも子どもの生活の中にすぐとけこむように」との言葉通りの作品を残されたのである。

資料(3)

まがりかど

倉橋惣三 作詞

室崎琴月 作曲

たろうさんがかけてきた じろうさんもかけてきた
まがりかどで ぶつかつた

たろうさんごめんなさい じろうさんごめんなさい
ごめんなさいが ぶつかつて
りようほう いっしょに はっはっは

あめふり

北原白秋 作詞

中山晋平 作曲

あめあめ ふれふれ かあさんが
じゃのめで おむかい うれしいな

ピッチピッチ チャップチャップ ランランラン

※1〜5番までのそれぞれに、思いやりの心が含まれている。

先生の創作に関するすべてがもりこまれた作品の具体例として、「しゃぼんだま」(資料(2))をあげ、考察を進めてみよう。

しゃぼんだまの心が大きな動作であらわされており、十分に子どもの自由表現の余地も残されて、のびのびと動作ができるように創作されている。更に詩の心からだにあらわすことによって、子どもの心情にふれ、やさしい心を育むことができるのである。

『思いやりの心』が歌の中に十分に含まれ、培うことのできる作品の中の代表的なものとしては、「まがりかど」「あめふり」があげられる。(歌詞資料(3))

子どもの生活指導として大切な暖かい思いやりの心が歌曲にも、動きにもあふれている作品である。

その他、子どもへの先生の思いのすべてが含まれている数多い作品の中から特に心に残るものいくつかをあげてみると、はと時計。かにさん。あり。あまだればったん。コンコンこ山。おまつり。やまのともたち。とびはねる。ポタンのぼうや。たきび。まつぼっくり。どん

ぐりころころ。ぞうさん。はる。ことりのおはなし。などがあ

作品のいずれをとりあげても、その中に、子どもの心の奥深くに残るもの、うたの心を子どもに植えつけることができるもの、うたの心と子どもの心が結びつくもの、言葉のおもしろさや副詞(擬音語・擬態語など)の多い楽しいもの、大人と子どもが話し合うようにして一緒に遊べるもの、など、選曲や動きに細かい心配りがある。作品ひとつひとつに先生の動かぬ信念を考察することができる。

結び

先生の作品は大小あわせると七〇〇余残されているが、「愛らしい子どもたちを通して、私の乏しい心を温かく再現していただけることは、この上もないよろこびであります……」と記されている通り、子ども達に喜ばれることをひたすら願い、また子ども達が喜ぶ作品であることを確信しておられたのである。

現代の子どもたちは、テレビマンガのテーマソングや
コマーシャルソング、など速いリズムが強調された音楽
にとりまかれていた。しかし、それらに対するリズム感
覚の素晴らしさは眼をみはるものがある。良いものは育
てたい、しかし、その中であってやさしい感情・感動す
る心、その心を表わすことのできる子ども達に育みた
い。そのためにも私達は、子どもの心の中にやさしい心
の種を蒔き、それを育てる栄養をあたえることのできる
教師・保育者でありたいと願うものである。

先生の偉業への感動とともに、良い作品はいつまでも
残し、その根底にある先生の指導観を学び、伝える課題
があることを深く深く自覚するものである。

参考引用文献

一、多和はる…「戸倉ハルの児童舞踊」…「体育の科学」第

25巻7号…杏林書院…昭和50年

二、戸倉ハル・小林つや江…子どものうたとあそび第一集…

不昧堂…昭和32年

三、戸倉ハル・小林つや江…子どものうたとあそび第二集…

不昧堂…昭和33年

四、六、戸倉ハル・小林つや江…子どものうたとリズムあそ

び「雪月花」の巻…ひかりのくに出版…昭和42年（雪の

巻のみ昭和43年）

七、戸倉ハル…「幼稚園における唱歌遊戯」…「師範大学講

座体育」第11巻…建文館…昭和11年

八、倉橋惣三…「幼児の舞踊」…「幼児の教育」第25巻6号

…フレibel館…昭和8年

九、戸倉ハル…「幼児の心にかへりて」…「幼児の教育」第

33巻8・9号…フレibel館…昭和8年

十、女性体育史研究会…近代日本女性体育史…日本体育社…

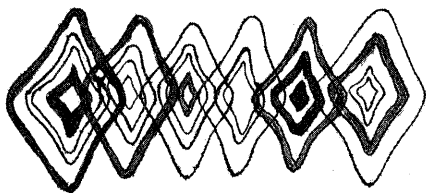
昭和56年

（白百合女子大学）

日本音楽著作権協会（出）許諾第88158871801

私の出会った人々 (二)

安島 智子



◇はじめに◇ 子どもらしさと子どもの位置

私はそれまで、子どもはかわいらしく、生命力に充ちた生き生きとした存在であり、しかもそれは全ての子どもに平等に与えられた子ども故の性質であるものと思っていた。しかし、このような私の思いこみは臨床体験によってみごとに覆されたのである。子どもの持つかわいらしさや、生命力に充ちた子どもらしさというのは、子どもがそのようにいられるような大人との関係があって育まれ、この育みによって本来的に在るものが現れ出たものであるということを実感したのだった。臨床家の仕事というのは、この本来的に在るものが発動し、現れ出づることを願ってクライアントを育んでゆく仕事である。こうして考えてみると、心理療法とは、育むことそのものである。昨今の流行語を用いるならば、「究極の保育」というところであろうか。

確かに子どもは誕生してからの時間が大人ほど長かったてはいないこともあって、人が生まれ来て、還り往く所により近く位置していると言えるのかもしれない

い。その意味では、子どもは人間存在の根源としての世界に境界をより近くしているものと考えられる。それ故にその世界の生成性や発展性、創造性といった性質を発動しやすい状態に在るし、一方ではその世界の暗さや虚無性、沈滞性をも敏感に知り得るものと思われる。

子どもの根源的存在と世界の境界の持ち方がその子らしさとどのようにかかわっているのか—その子が生き生きしているにしても、不安な様子にしても—という捉え方をしてみることは子どもを育む場においては意味ある視点ではなからうか。

それはまた、生まれて以来の歴時間の座標軸に収束される事柄と根源的存在と世界との関係のありようが、今、ここに在るその人のありようとなるものと考ええるからである。

◇子どもらしく、かわいらしくなった男の子◇
△物おしせず、一見元氣そうに見える幼稚園年長児ゆう

ちゃん(仮名)のこと▽

〔最初の印象〕

ゆうちゃんは、色黒で、半ズボンからのびた素足にズック靴をはいた勢いのいい子だった。初めて会ったこの日の第一印象は「かわいくない子」というのが正直な実感であった。それまで子どもに対して、「かわいくない」と感じる体験がなかった私は、その子どもらしくないさに大変ショックを受けたのだった。

〔ゆうちゃんが来談するきっかけになったこと〕

ゆうちゃんが来談することになった動機は「発音がはつきりしない」ことや「友達と遊べず、いつも一人遊びをしている」ことを理由に幼稚園の先生から来談を勧められたからである。

〔家族と生育歴〕

会社員の父親(47歳)、洋裁をしている母親(39歳)、本人(5歳6か月)の三人家族である。母親の話によると、ゆうちゃんにとって母親はこわい人で、父親はゆうちゃんの家来とのことであった。ゆうちゃんが友達と遊べないのは、母親がいつもゆうちゃんについて歩いたせ

いかかもしれないと、家の中においても子どもの泣き声が聞こえると居ても立ってもいらなくなるとのことが話された。

生育歴の事項に書かれたことでは、おむつを十か月でやめていることや、二歳以後もよだれが出ていたこと、爪かみがあり、友達がいけないことなどが気になった。こうした母親が気づいて書いて書いた内容からだけでも、お母さんへの最初のプレゼントであるウンチを充分に受けとってもらえなかったことに現される母子関係の問題や、二歳以後のよだれから、この子の不安な状態が、爪かみからは攻撃性が自分に向かうしかない状態であることが、友人がないことから、人との関係を上手につくれないことが推測される。

（ゆうちゃんの悩み）

ゆうちゃんは、いろいろなことがよくわかった頭の良い子だったが、幼稚園生活はなかなか大変であった。ちょっとしたことから、「ウソツキ」にされてしまい、友達からいじめられたり、なんでも欲しがるからと、幼

稚園の先生に「お食さんだ」と言われたり、いじめられて泣いて帰ると「やられたら、やりかえしなさい」と叱られたり、悔しいことがいろいろあったのである。

これらのことをもうすこし詳しく話してみよう。

ゆうちゃんが「ウソツキ」と言われるようになったのは、こんなことがあったからだ。

ある日曜日に、ゆうちゃんは引越しをして遠くに行つたお友達の家にお母さんと行くことになった。しかし、ひどい雨が降ってしまったのでお母さんは中止にしなければならなかったのだが、ゆうちゃんはなかなか納得しない。そこでお母さんは、「火曜日に行こうね。幼稚園を早ぼけして。お母さんが迎えに行つてあげるから」と言つて説得し、その計画をとりやめることに成功した。

火曜日、ゆうちゃんは幼稚園に行き、「今日ね、しんちゃんところに行くんだよ。早ぼけして。お母さんが迎えに来るの」と先生やお友達に言っていたのだが、お母さんはゆうちゃんがその後何も言わないのもういいものかと思ひ、ゆうちゃんをむかえに行かなかつたのだ。お

母さんが迎えに来るものと待っていたゆうちゃんは、お友達から「ウソツキ」と言われ、とうとう「ウソツキ」にされてしまった。子ども達は、「ウソをつく子はよくない子」と教えられていたので、ゆうちゃんはとても辛い思いをしていたと思う。

また、ゆうちゃんはお友達が持っている物をいつも「ほくも欲しい」と思う一方、また自分の持っているものをお友達によくあげたがった。外に遊びに行く時におけるものを持って出ないと出かけられない時もあるほどだったのである。お母さんはゆうちゃんが他人の物を欲しがることをゆうちゃんの短所としてあげ、ゆうちゃんが人に物をあげたがることを「人がいい」と長所としていた。幼稚園の先生の意識では他の子の持っている物を欲しがることに對して、具体的にわからせようと「お食事さん」と呼びかけ、なんでもほしがる乞食のようなことをしてはみっともないのだということを教えようとしていたそうだ。しかしこれは幼稚園の先生がゆうちゃんをかわいいと思えていないことやゆうちゃんによって先

生の攻撃性が刺激され、それがゆうちゃんに向けられていることによるもののように思われる。ともあれお母さんも幼稚園の先生もどうしてゆうちゃんがこういう気持ちになるのか理解できなかったし、気づかなかったように見受けられた。

さらにまた、ゆうちゃんは家に泣き帰ることがよくあったのだが、お母さんは、「男の子は泣くものではありません」とか、「やられたら、やりかえしなさい」と言っていたそうだ。

ゆうちゃんはこんな時、くやしい気持、悲しい気持、情けない気持をどうしていたのであろうか。どうしていいといいのだろうか。

この辺でゆうちゃんのブレイルームでの様子に話を向けていきたいと思う。

―ブレイルームでのこと―

「一人で遊ぶ」

初めて来談した日のゆうちゃんは、母親といっしょに

プレイルームに入った。母親はゆうちゃんに次々と指示をする。そこでセラピストの私は、「お母さんはこちらにどうぞ」とゆうちゃんからすこし離れていてもらっていた。するとゆうちゃんはプラレールを手にし、かなり集中して手ぎわよく線路を組みたて続け、できあがると汽車を走らせるのだが、すぐに「ガーッ」という大声と共にそれらをメチャクチャに崩し、また組みたてて走らせるということを繰り返すのだった。その間は相手が必要とする様子もなく、夢中で遊んでいる。

この様子は一見して元気な子どもと受けとれなくはない。しかし助けや仲間を必要としている様子もなく、動き出すと破壊することを繰り返す姿になんとも言えない気持ちになった。動き出すと破壊されるこの汽車はゆうちゃん自身の姿でもあったのかもしれないが、また同時に自らの内で自己完結させようとするかのごとき破壊的な攻撃性を感じたのだった。そしてその表情はなんともかわいくなさを感じたのである。

この破壊的な遊びは、二回目のセッションでは自動車

を壁にむかって走らせ、くり返し壁に衝突させる遊びや、ボールを床や壁に投げつける遊びへと変化した。これはゆうちゃんの未解決な気持ちと、そのエネルギーを壁や床にぶつけ、投げだしているように感じられたので、ゆうちゃんがボールを投げつけた時には必ず拾うようにした。繰り返し、繰り返し、拾い続けた。ゆうちゃんを受けとめ続けたのだ。

すると、三回目のセッションではこのボールを投げつける動きが、ビックボールを転がすことに変わっていった。この変化は、攻撃的なエネルギーや憤りの気持ちが受けとめられたことにより、エネルギーが突出する動きから、回転する動きに変化してきたものと思われた。

【関係のはじまり】

四回目のセッションでは、ゆうちゃんがトランポリンの上にあがるのについて私もあがった。すると彼はあくらをかくように座りこんでトランポリンをゆっくりと揺らす。当然私もいっしょに揺れていたのだが、まるでゆ

うちゃんとふたりで、ゆりかごにでも乗っているような心地良さだった。代わって私がトランポリンを揺らすと、ゆうちゃんは静かにしている。かなり長い時間、この沈黙のやりとりが続いていた。ゆうちゃんは突然電話のところにやって、「ぼくの家は××番だよ」と言う。私は大急ぎで電話をした。

「もしもし、ゆうちゃんですか？」ゆうちゃんは何も言わなかったが、電話をかけてもらった嬉しさを体で表わしていた。ゆうちゃんはなんて言っているのかわからなかったのだろう。電話をかけてもらいたくても、「電話をかけて」と言えず「ぼくの家××番だよ」と言うのを思いついたのがせいじっぱいだったぐらいなのだから。この日は初めてゆうちゃんが私といっしょに遊んだ日だった。

「生命の動き出し・表現へ向けて」

五、六回目のセッションで目だったことは白い大きなボールにしがみついていたのしかかったり、おっこちたりす

る格闘を何度も何度もくりかえしていたことだった。球との格闘がまるで僕という確かさと取り組んでいるように感じられた。汽車にまたがって走ったり、自動車を手にもって床を走らせたり、うば車を押して歩いたり、動くものといっしょにゆうちゃんは動き始めた。ボーリングのピンを部屋のあちこちにいくつかずつまとめて置いたり、移動したりする。彼の身体の中を動き出した生命に従って動き、配置をしているようなそんな気がした。ゆうちゃんを私との関係が確かになると、ゆうちゃんは自分をも確かにしはじめた。それがボールとの格闘と思われる。そしてこの姿はゆうちゃんの生命が流れ始め、根源的存在世界の生成性を汲みあげることができ始めたとも考えられる。

七回目のセッションでは、立ってトランポリンを飛びながら箱庭の棚の人形をめがけてピストルをバンバン打っていた。私がそばで色画用紙を出していると、突然やってきて、紙を四つに折り、「おさいふ」と言って、すぐにまたトランポリンにもどる。

ゆうちゃんの生命の流れがより活性化し、拡散していったように感じられていた気持の動きもずいぶんまとまってきたように思われ攻撃のエネルギーは目的に向かうようになった。そして意味ある形を創り始めた。表現の始まりである。

その後、箱庭の棚にあるカエルがお気に入りになった。家でもカエルをもちょうことがあったり、プレイルームでもカエルの歌を歌ったり、カエルはゆうちゃんの特
別な仲間になった。その後仲間入りしたのは手で操作すると口を大きくあける。バックンガッチャンである。

トランポリンの飛び方は、ひっくりかえったり、こぐようにしたりバリエーションが複雑になった。そしてゲラゲラおなかの底から、全身で笑いこぼる。いっしょにいる私もとても楽しい。ゆうちゃんの顔はとってもかわいくて、いきいきとしている。

「捨てる遊び・ゴミ車53台の爆発」

十二回目のセッションでは、プレイルームのままごと

箱をかきまぜ、「わーくさっている」「まきぐそみたい」だと汚ない物を次々と捨てる遊びをすることがあった。

その遊びは次回に、ゴミ集め遊びに変わった。ゴミ1号車〜53号車まで各々、ゴミを集め持っていくと、車は爆発してこわれてしまう。ゴミ車は53回も殺され、53回生き返った。

「指輪と万華鏡・戦い・自動車の完成」

十六回目、私にプレゼントを持ってきた。ガンダムの絵のついた箱の中から、ルビーの指輪と万華鏡をこわして出したというビーズを見せて、そっとしまった。この日はエネルギーで体を思いっきり使い、「宇宙線のバリアに入りました」と機関銃を向けて挑発してくる。

私も、「バリア溶解光線ビビビ」と激しい打ち合いになる。さんざん打ち合いをすると、ピタッとやめて床に座り込み、ブロックを組みたて始めた。かなり時間をかけて完成させたのは自動車だった。壁に自動車をぶつけていた頃のゆうちゃんの姿はどこにも見つけられない。

「うんこごっこから、かくれんぼへ」

十七回目安心してうんこを出せるようになったらしい。以前クサイと捨てていた「まきぐそ」（ソフトクリームの上だけ）を、「まきぐそだ」と喜んでおしりにあて、「ウンコポタッ」とうんこをして喜んだ。この日は二人で、「うんこポタッ」を合唱しながらうんこごっこをした。この頃はうんこ、しょんべん、おちんちん、おしりとやたら口にする。言ってみたくてしようがないという感じだ。また楽器を使って即興演奏の合奏をしたり、体ごと私にぶつかってきては投げとばされたり、さかさまにされたり全身を使った遊びを喜んだ。彼の体にしっかりとつけられていたよろいがとれた感じに気づいた。力強くなったなあという感じがする。

こうして全身を自分のものにし二十回目ではかくれんぼ遊びをしたのだった。

「いっぱい遊んで、最後に」

三十三回目のセッションである。本当にいっぱい遊んだ。ゆうちゃんはもうすぐ一年生だ。ブロックの箱をとり出し、設計図を開く。その中からつくるものを決め、必要な部品をそろえていく。部品の足りないものは形を変えてつくっていく。こういう変更もできるようになった。自動車、飛行機自動車、船をつくりたかったが変更したロボットの三つの作品が完成した。「こわさないでほしい」というのに応えて、私の机にしまったのを確認し、にこっとして「さよなら」をした。あんなにいやがっていたおわかれだったのに。あっさりとした最後だった。相談室ですることが終わったのであろう。

もちろん来談動機となったことはいつしか解決していた。ゆうちゃんは根源的世界の暗さをどこかで知りながら、その世界の生成性や創造性を汲みあげ、遊びこむ力を持ったかわいらしさを感ずる子に育っていた。

（このはな児童学研究所）

ことばを生きる体験 (一)

—— 乳児との語りあい ——

浜口 順子

〔エレベーターの中で〕

エレベーターにたまたま乗り合わせた二人の人が、無言のまま階級ランプの流れゆく点滅を見上げている——これはことばの交わされない状況の居心地悪さを象徴するひとつの構図といえよう。乗り合わせた瞬間に軽く会釈でもしておけばまだ救われるのだが、さらに自然なことばのやりとりがあればその狭い空間でのひとときは一層過ごしやすいものになるだろう。たとえは、ひとりの方が大きな荷物を両腕に積み上げているのを見て、「大変なお荷物ですね」「ええ、でもこれも仕事ですからね、慣れてますよ」とことばを交わしたり、小さな子ども連れの母親らしき人に「かわいいお子さんですね、坊やいくつかな」「三つになったのね」などと話したりすることもあるだろう。この会話のなかで荷物や子どももの

年令のことなどは話し手にとって是非とも情報として知りたいたいような対象となっているわけではない。なにかことばを交わすことと自体がここでは大切なのである。

ことばが人と人との関係の性質を変えるはたらきをすることはあらためていうこともないだろうが、右の例にみるような、ことばのなかに本来含まれている意味はともかく、語られることと自体が状況を新しくするということばの一側面について考えてみたい。

〔赤ちゃんに語りかけること——声の介在〕

歌謡曲ではないが、「こんにちは赤ちゃん、わたしがママよ」というようなことを、たいていの母親が生まれて間もないわが子に語りかけるのではないだろうか。こちらの姿をどれだけその網膜に映し出しているのか、こちらの声をどの程度雑音と聴き分けているのか、こうした問題は近年の乳児研究がかなり解明してきてはいるけれど、そんな知識とは関係なく、とりあえず何かは伝わるだろうという願望を抱いて話しかける。いやむしろ自

然と語り出してしまっているという方が現実に近いだろう。乳をその口に含ませてやるときに「おっぱいですよ……ここですよ……」と教えるようにしたり、おしめをかえるときにも「おしっこしたのね……きれいにしましょうね……」などとことばをかけながら手を動かしている。よほど疲れてでもいるときは別だが、たいてい状況にあわせて語りかけをしている。

なぜこのような行動をとるのだろうか。理由として考えられるのは、ことばの理解はできなくても伝えたい事柄の雰囲気ぐらいは伝わるだろうと、思って話しかけるということ。あるいはもうことばの学習は始まっているのだから、と意識的に語りかけをしている場合もあるかもしれない。しかし人は道端のイヌやネコにも「おいで、おいで」とか「おうちはどこ」などと話しかけるのである。理由としてあげればたしかに右のようなことになるかもしれないが、それ以前に理由もなく話しかけたくなる衝動があることもたしかである。つまり人は関心を向けている対象（人、もしくはそれに準ずるような動物や

ものなど)に声をかけたくなるのだ。そしてその声がかとばのかたちになっていることが多いということである。ことば以外にも歌、叫び、嘆息など状況のありかたに左右されて多様な声のかけ方がある。

それではなぜ相手に声をかけたくなるのだろうか。反対に声のない状況を想定すると、たとえば先のエレベーターのなかの「居心地悪さ」に思い当たる。もともと知らないどうしであっても、エレベーターの狭い閉塞された空間がおたがいを無関心にはさせておかない。相手のことが気になるうえに、相手からも気にされているように落ち着かなくなる。個と個が出会い、安定した共存空間を得るためには、それぞれ固有の世界の一部を相手に向けて開く必要がある。つまり自分の一部を相手の前に現し分かちあう行為に迫られるのだ。その典型は手をさしのべる動作であろう。そして声もこのとき手にかわるはたらきをしている。相手に声をさしのべる。たいていはことばのかたちとなって語りかけられる。ことばが手のようにさしのべられて相手との隙間をつなぐ。

村瀬学は、人間にとって発声とは沈黙という安定、充足した領域を放棄(断念)して仲間(「類」)のなかに個を現す事だとしている。たしかにこれは彼が問題にしている「緘黙児」の構造を考えていくうえで有効であるに違いない。自分の世界に閉じこもって、喋ることによってその閉じた系を破らないことがその個にとっての安定につながるのとらえているからだ。しかし普通人と人に出会い互いに気づきあっているような状況では、それぞれの人の固有の世界はそれぞれの独立した領域を保持しにくくなり、沈黙していることが安定、充足に通ずるとは言いがたい。むしろその息詰まるような静寂を声によつてやわらげたい衝動にかられる。他者との関係性のもとでは、個としての自足はかえって居心地悪く感じられ、他者に開かれようとするものなのだ。妥協とか服従などの特殊な関係のことを言っているのではない。人と人との間、文字通り「人間」どうしの根源的なあり方について確認しているのである。

声は人と人の間に横たわっている沈黙に「間(ま)」

を与えて、関係を調整している。

朝、目覚めたばかりの赤ちゃんに「おはよう、朝ですよ、よくねむれたかな……ん、そうか、気持ちいいねえ」などと語りかけながら、母親もまた今日一日始まるのだというすがすがしさを覚え、同時に赤ちゃんの体調や機嫌を自然に感受する。ここで実際に語っているのは母親ひとりだが、実は赤ちゃんから伝わってくるものを受けながらのリズミカルな交歓になっている。また赤ちゃんと遊んでいるときに、「パッパババー」とか「カッキククック」などの擬音を伴って顔を近づけたりからだを揺らしたりしてやることもあるだろう。試しに途中でこうした声を出さないと身体運動だけ続けてみても、赤ちゃんの機嫌は相変わらずでリズミカルに笑っていることもあるのだが、声を出していないとなんとなく遊びづらいうような感じがおとなの方に残る。

山田洋子が乳児期初期の対人コミュニケーションを「うたう」関係として特徴づけているのは示唆に富む。

『うたう』は根源語であるから、音曲をつけて歌うこと

も、表情やしぐさで『うたう』（舞う、踊る）ことも、言葉で『うたう』（語る）ことも、拍手や手じめやパンザイ三唱で『うたう』こともあるが、その基本は、気持ちを合わせ、互いに響きあい、共鳴しあい、同じ感動のなかに融け合うところにある。」

このような関係のもとでは、相対する二者が双方から歩み寄って声を出し合うというより、まず二者のあいだに状況があつて、それが海綿のように双方から声を染み入らせているととらえられないだろうか。（個人の意志以前に）その人が置かれている状況が声を誘発して、二者のあいだの間（ま）を調整しつつ関係を展開させていくという構造が、乳児に語りかけようとする衝動を説明していると考えられる。

〔ことばとの二つの関係——「使う」と「生きる」〕

まずことばによって伝達される意味内容の性質について言及しておこう。たとえば「父」ということばは男親、（キリスト教における）神、（比喻として）創始者な

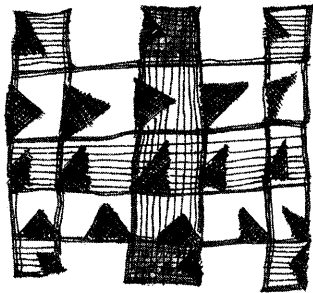
どのひろく社会的に通用する（辞書にでてくるような）意味内容をもつ一方で、ことばを使う人によって固有の「父」のイメージがあるし、またそのことばが使われる個別具体的な状況に結びついて「父」という語に特別な意義づけをする場合もある。ことばに込められる意味内容の一般性と特殊性という二重性を考慮して、前者を「語義」、両者の複合体を「意味」と呼び分けていくことにする。

心理学的に見て、ことば外に語りだされる外語と、思考や認識の用具としての内なる内語とに分けて考えられている。外語は要求や感情などを伝達するために人と人の意思疎通（コミュニケーション）を円滑にすすめるのをたすける。一方、内語は人がまわりの世界を一定の秩序にしたがって整理して認知する基盤としての機能をはたして、概念的・抽象的思考を可能にしているものである。これら内語や外語の概念が、そもそもことばとは記号として一定の意味を指示するものであるとする見方を基本としている点では共通している。

ところで乳児に語りかけることばはどうだろうか。たしかにことばである以上そのなかに意味が含まれてはいらぬ。だが、かならずしも意味伝達が目的になっているようなコミュニケーションとはなっていない。おとなと乳児との居心地よい状況のなかで「うたわれ」ていることばは、まず語りだされて、あとから意味がついてくる。

だからレロレロレロとか即興の鼻唄などの特に意味の盛り込まれていない声も、ことばに準じてよく口にされる。マザーゲースの詩が英語圏の子どもたちに親しまれ、子どもおとなを問わず、その日常的な言語生活のなかにも脈々と息づいているのは、ころころところがったり、波打ったりする語呂あわせのもつことばの妙がわくわくと心踊らせるからで、意味は自在にあとから駆けめぐってくるのに違いない。ことばの意味をひとまず解除して、ことばが語られることによって生じる表情を状況のなかで感受する体験は、もとより乳児との関係に限られるわけではなく、人と人が交わるところで日常的に営まれているのである。

ことばと人との日常的な関係のあり方を考えてみよう。まず思いつきやすいのは、意味を指示する記号としてことばをとらえて、人がことばに意味を付与し、ことばを「使う」という関係性である。これに対して、ことばを意味から浮遊させて、語られることば（音律や語り方）のなかに人が融合するような関係がある。これをひとまず人がことばを「生きる」関係と考えることにする。ことばに対して人がとる二通りの態度（「使う」と「生きる」）は、実際には不可分であることが多く、そのとき人はことばを使いつつことばを生きている。「どっこ



いしょ」と荷物を持ち上げるとき、状況に矛盾しない有意味のことばを「使い」ながら、そのことばのもつイメージを「生き」て、からだ全体に勢いをつけるのである。しかしことばを「使う」だけで「生き」ていないこともよくある。なにか他の事に気を取られていて、相手が「ねえ、課長ったらひどいわねえ」と同意を求めてきているのに、ほとんど自動的に「うん、ひどいひどい」などと生返事をしている場合などは「生き」ているとはいえない。この場合は、状況に引張られてことばが誘発されているので、発声のメカニズムとしては乳

児に語りかけたくなる場合によく似ている。しかし「ひどいひどい」ということは語義が状況の表面的な流れにどうにか適合しているだけで、ことばがその固有の状況のなかで何を意味し、その人間関係をどう展開させるかという点においては対照的といえるだろう。

ことばに対する二通りの態度は（ことばを「生きる」とき、人はいわばことばのなかに住みこんで融合するあり方を示すので、正確にはことばに対する態度とはいえないのだが）、状況に応じて、比重を変えながら現れると考えるのが現実的であろう。

〔新生児の微笑に伝えられるもの〕

新生児期にみられる生理的的微笑というのがある。うとうとしかけているときによく口端をピクリとほほえむように動かす。生後間もない赤ちゃんというのは、顔の表情の変化に乏しく、せいぜい泣くぐらいなので、この「微笑」に出会うと心なごむものがある。しかし興味深いことに、たいていのおとなは「あっ、笑ったわ」と喜

びの声をあげるやいなや、「でもこれは本当に嬉しくて笑っているんじゃないのよねえ」と、まるで喜んでも仕方がないんだと自らに言いきかせるように言い直すのである。新生児の「生理的的微笑」についてこれだけ一般的によく知られていること自体が不思議のような気もするが、これは純粹な知識としてよりも、やはりその微笑を目のあたりにして「これは普通の微笑ではない」という状況判断が的確にはたらいっており、その確信が知識を追認しているというのが現実であろう。

一般的に、微笑というものが快い気分や相手を受容している態度を表すこと（微笑の語義）から、微笑はひとつの記号であり、ことばに準ずるはたらきをしていると考えられる。だから、自分からはまだ明確なことばを発しない乳児の微笑は、おとなにとってはことさら注目したくなる「ことば」（サイン）のひとつである。おとなが赤ちゃんをあやすとき、赤ちゃんが笑ったりほほえんだりするのをただただ楽しみにしている。

生理的的微笑を前にして、一瞬は嬉しくなるが、その微

笑がかたちだけのもので、いわば一般的な語義とは別の意味内容を含んでいるらしきことに気づいて戸惑う。微笑という形式と語義とをただ自動的に直結させるのではなく、微笑の語られている具体的な状況を生きようとすからこそかえって戸惑いに近いものを感じてしまうのだろう。つまり赤ちゃんに関心を注いで共存的状況にあることによってその赤ちゃんの微笑の意味を、一般的な語義に制約されないで自在に読みかえることができるのだ。しかし状況に固有の意味と語義との間の矛盾を味わうのは、どこか不安でスリリングな体験でもある。だから二、三ヶ月頃からみられる「快」の記号としての微笑が見られるようになる、なお一層おとなは幸福な気持ちになるのであろう。

ことばを記号として「使う」一方で、意味から遊離したことばを「生きる」体験が人と人との関係的狀況を變質させることについて、今回はおもに乳児とおとなのいる狀況に着目して論じてきた。後半は、話しことばをも

つ子どもと共にことばを「生きる」問題を扱いながら考察を深めていきたいと思う。

△文献▽

竹内敏晴「ことばが劈かれるとき」思想の科学社、一九

七五

村瀬学「理解のおくれの本質」大和書房、一九八三、一

六七—一六九頁

やまだようこ「ことばの前のことば」新曜社、一九八

七、六五頁

(お茶の水女子大学)

訂正

四月号 P. 37 「ある園のたより」欄「川崎若菜幼稚園」とあるのは「川崎若葉幼稚園」の誤りです。お詫びして訂正いたします。

「倉橋先生から学んだこと」たくさん
の先輩方から寄せられた原稿が、予定の
枚数をはるかに越えたことで、皆様方の
先生に対する思いの熱さを強く感じまし
た。書きはじめたら沢山、次から次に思
い出が出てきて……とおっしゃる方もい
らして。頁数にも限りがございますので
又、号を改めまして、倉橋先生への「思
い」を書いていただけたら、と思ってお
ります。

同封されたお手紙の中に次の様なお便
りがございました。

——菊池先生がお書き写されました保
育法の講義録が『幼児の教育』誌に掲載さ
れますご企画を時期を得たものと、保育
に関心のあるものがひとしく喜ぶこと
でございます。改訂されます幼稚園教
育要領は素直に理解され難い点もあるよ
うに聞き及んでおりますので、私ももう
一度勉強させていただきましよう、楽
しみにしております。——

「まぼろしの倉橋ノート」とまでいわ

れたこのノート。五十余年を経てまでも
現在に生かされ、又、私共が学ぶ機会を
与えられたこと、うれしく思います。

六月。——学年が新しくなり、緊張
していた子ども達も、そろそろ自分の居
場所に慣れ、落ちついてきた頃ではない
でしょうか。

我が家の長男も、今年のはれて年長
組。はじめての体操の時間、はじめての
うさぎ当番、又、新しく入園した年少組
のちびちゃんのお世話。はじめは緊張し
ていましたが、仲良しの友だちと一緒に
できるのがうれしくて、とてもはりきつ
ています。大きくなる、信頼してまかさ
れるということがうれしくてたまりませ
ん。

何をやっても新鮮で、何をやってもは
げみになるこの時期。いろいろなことを
“体験”して、栄養を吸収してほしいと
思います。

(K)

幼児の教育 第八十八巻 第六号

六月号

◎ 定価 四一〇円(税込)

平成元年 五月二十五日 印刷

平成元年 六月 一日 発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 本 田 和 子
発行人

東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

TEL・二九二七七八一(代)

◎本誌御購読についての御注文は発売
所フレイベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がございましたら、おとりかえいたします。

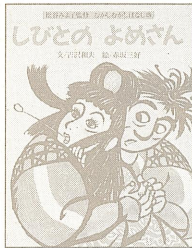
むかしむかしばなし

松谷みよ子監修
全10巻

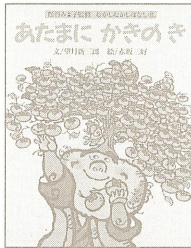
こわい話、不思議な話、かなしい話、ときには、ひっくり返って笑いながら、日本のむかしむかしばなしから、子どもたちが、勇気とやさしさをもらって大きくなってほしい……そんなねがいをこめて、松谷みよ子と日本民話の会が、子どもたちに贈る、珠玉のむかしむかしばなし傑作絵本集です。

◎A4変型判／各32頁

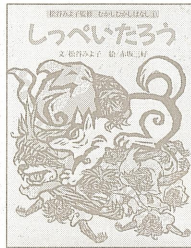
◎定価各一、〇〇九円
(本体九八〇円)



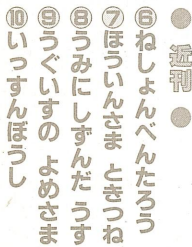
③しびとのよめさん
吉沢和夫／文 赤坂三好／絵



②あたまにかきのき
望月新三郎／文 赤坂三好／絵



①しっぺいたろう
松谷みよ子／文 赤坂三好／絵



⑥ねしよんべんたろう

● 通判 ●
⑦ほついんさまときつね
⑧うみにしずんだうす
⑨うぐいすのよめさま
⑩いっすんぼうし



⑤かべぎつねのたからもの
渡辺節子／文 赤坂三好／絵



④かっぱのむこう
水谷章三／文 赤坂三好／絵

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キッズブックの

フレーベル館

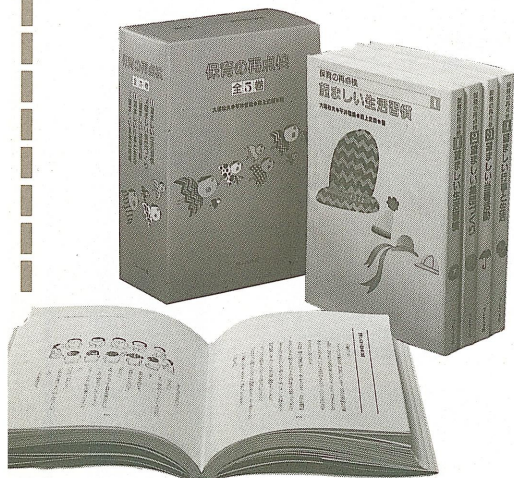
保育の再点検

〈全5巻〉

「保育の再点検」の大きなねらいは、社会性の育成にあります。子どもの社会性を育てるにはどのような保育をしたらよいかとお考えの先生方に、きつと役立つ〈全5巻〉です。

本シリーズの特色は、

- 日常的で身近なテーマをとりあげています。
- 保育事例を分析し納得いくまで話し合われています。
- 現場からの声として、よその園の保育が紹介されています。



- | |
|-------------|
| ① 望ましい生活習慣 |
| ② 望ましい集団づくり |
| ③ 望ましい当番活動 |
| ④ 望ましい行事と生活 |
| ⑤ 望ましい言葉の指導 |

平井信義・大場牧夫・森上史朗 著

A5判・セットケース入り・各208頁・セット定価6,953円(本体6,750円)